

# 来日岳と三川山のギフチョウ

## 足立 義弘

1975年に豊前市下鶴井、城崎町来日岳および三川山のギフチョウを採集あるいは目撃できた。下鶴井での目撃記録は前述した(p.24)ので、ここでは来日岳と三川山での採集記録および観察を報告する。

### 来日岳 1975年4月16日

城崎側の車道から頂上へのコース。天候は太陽にかまがかかり、薄曇りの状態。採集地点は紅葉平。10時前に4~5頭を目撃し、うち2頭を採集した。採集した2頭はともに、他に捕獲した2頭も含めてあることを確認してから逃がした。コナラなどの落葉広葉樹と、部分的にアカマツ、エズリハを含んだ比較的ない林内で、スミレの花に吸蜜したり、日光浴をするように草の葉上に止まったりしていた。1頭は追いかけたせいもあるが、7~8メートルのアカマツの回りを高く飛び、3~4メートルほどのエズリハに止まった後、ふたたび下へ降りて地表に落ちていた枯木に止まったところを採集。もう1頭はスミレの花で吸蜜中のところを採集。付近での食草は発見できなかった。

帰りには13時過ぎにやはり同じ所で頭を目撃。うち地表面(赤土)に止まっていたものを採集。これも含めてあった。地表面は湿っていたが、吸蜜していたかどうかは不明である。この時はもう完全に曇っており、暗くはなかったが、太陽のかけは見えなかった。他に目撃した個体も、吸蜜しており、地表面あるいは切り株などに止まっていた。追跡できなかった。なお、採集地点の標高は約880メートル。

### 三川山 1975年5月11日

日高町側の林道より登った。天候は曇りとときどき晴れ。採集地点は三川山山頂より1.5キロほど南の電波塔付近で、林道上で頭を目撃。うち1頭を採集。含めてあった。時刻は11時過ぎ。動きは活発で高低の大きな波を描いて飛翔していた。付近には白い斑入りのカンアオイ属の1種が至る所に見られた。標高約880メートル。

帰りは林道の途中で竹野町と目高町の境界である尾根へ出、水口へ下るコースをとった。目高町側の林は広域にわたって伐採されており、日当たりの良い草地と化していた。各所にカンアオイ属の大きな株があり、中には茎が20センチ以上もあると思われる大きなものもあった。700メートル付近で上頭至目撃。さらに500メートルの杉林へ入る手前で、翅が破損し鱗粉の多少薄くなった早を捕獲した。この早はそのまま逃がした。

さて、三川山で同じ日に、頂上付近で採集した個体が無傷の場合、それから下って標高500メートル付近で発見した個体が翅も破損し交尾板をもった既に交尾済みの早であったこと、またより低標高の栗日岳では約1ヶ月近くも前に新鮮な早ばかりが見られたことなどから、ギブチヨウの羽化期はその生息地の標高（従っておそらく気温）と関係があるものと思われる。そうであれば、同じ三川山でも上部の生息地（880メートル）と下部の生息地（500メートル）とでは、羽化期が幾分ずれてくるだろう。ここで、4月16日の栗日岳で見た個体と5月11日の三川山上部で見た個体が、翅の新鮮さの状態で羽化後同じく短い日数を経たものであると仮定すれば、この羽化期については両地域間で約26日のずれがあることになる。もし単純に羽化期が標高差に比例して早くなったり遅くなったりするのだとすれば、上の両地域の標高差は550メートルであるから、100メートル高くなると羽化期は約47日遅くなることになる。この荒っぽい計算をそのままあてはめれば、例えば三川山の上部と下部の生息地では、約17.9日の羽化期のずれが生じることになる。このような距離的には比較的近接した生息地間で、標高差によるかなり大きな羽化期のずれがもし本当にあるとすれば、2つの生息地の間の個体の交流はいったいどのような形をたどるであろうか。

ギブチヨウの調査でも、交尾は早の羽化直後、ほとんど羽化した場所から数センチを離れておこなわれるのだろうか、交尾の行われる場所、生息地による羽化期のずれ、各早の羽化期のずれ、また個体の移動範囲等を具体的に調べることによって、その中に小さな生息地を含んだより大きな、ひとつの山といった生息地におけるギブチヨウの生活のありようが理解されることになるだろう。こういった研究は容易ではなく、あまりなされていないと思うが、興味深い問題であろう。三川山の上部と下部で、それぞれ新鮮な早と老いた早を見出したことから、上のような疑問を抱いた。